

ナバナのモザイク病

平成17年(2005年)12月19日

平成17年11月に、徳島市、小松島市、那賀川町のナバナで、葉が著しく縮れ、葉の伸びが止まり、株によっては、葉柄の裏にえそ条斑が見られるものがありました。

DAS-ELISAでウイルスの検定をした所、カブモザイクウイルス(*tunip mosaic potyvirus* TuMV)とキュウリモザイクウイルス(*cucumber mosaic cucumovirus* CMV)が検出され、主に2つのウイルスの重複感染による症状と判定されました。なお、キュウリモザイクウイルスが検出されず、カブモザイクウイルスの単独感染の場合もありましたが、症状は同じでした。

カブモザイクウイルス、キュウリモザイクウイルスとも、アブラムシで伝搬されるとともに、汁液伝染しません。ただ、種子や土壌で伝染はしません。

対策としては、アブラムシの防除、手や機具の消毒を行うこと、症状が現れている株を抜きとること(枯れるまでは感染源になるので、土の中に埋めるなどを行う)があげられます。

寒い時期は、アブラムシの活動も少なく、ナバナの生育も遅いため症状が広がるのが少ないと思われませんが、3月下旬以降気温が上がりアブラムシの活動が活発になり、ナバナの生育も早くなると症状が現れたり、感染が進むと考えられますので、十分ご注意ください。





徳島県農業研究所病害虫担当・病害虫防除所 広田恵介